
雲の糸

ミッシ・ゴッシュ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雲の糸

【著者名】

ミッシ・ゴッショ

Z5280F

【作者名】

あらすじ

退屈な日常、通勤途中に見付けた白い糸。その先には何が待っているのだろう……。

目覚まし時計の耳障りな音が朝を告げる。

俺はベッドから這い出ると、台所に行きコップに注いだ水を一気に飲み干した。食パンをオーブンにぶち込みテレビをつける。毎日の習慣だ。

「……雨が降るので傘をお持ちになつてお出掛け下さい」

大木ちゃん今日も可愛いなあ。トーストをかじりながらぼーと見ていた気象情報に呟く。俺はこのお天気お姉さんを見る為にこのチャンネルに合わしている。この笑顔が毎日の活力源だ。

俺はテレビを消し服を着替え、歯を磨くと家を出た。大木ちゃんに言わされた通りに傘を持つて。

腕時計を見ると7時38分。この時間なら余裕で電車に間に合ひ。空を見上げる、近頃はそんな暇さえ無かつた。

久し振りに駅までの道のりをのんびり歩く事にした。

暫く歩いていると、一本の『白い糸』を見付けた。ふわふわと中空を漂うその白い糸。子指と同じ程度の太さ、糸と言つには多少無理が有るが糸が軽く絡まつた毛糸の様なそれ、触ると柔らかい。

糸の先を辿ると一つの大きな雲があった。見上げた時に気付いたが、その糸は大小様々な形のその全ての雲から垂れている。そして、それを登っている人達があちこちにいる。

その先に何が有るのか、俺は見たくなつた。周りの人々も同じ理由なのだろう。

俺は上着と鞄、それに傘を道の端に置き、その糸を登り始めた。どれだけ登つただろうか、眼下に見下ろす人々はこの手に収まる程に小さくなつていた。それでもさうして登る。しかし、依然として雲は遠い。

少し肌寒いそれ程の高さ、落ちれば確実な死が俺を待つ。だが、ここで諦める訳にはいかない。

雲の上、確かめたいこの田で。その思いが俺の腕を再び、つき動かす。

風が出て來たな。だが、この程度どうつて事無い、俺は一心不乱に上を目指す。

突然、白い糸がピクピク動いた。

釣り針に魚が食いついた時の様にピクッピクッと。

俺はすぐに分かつた、誰かがこの糸を引っ張つている。この糸は俺のだ、止める、触るな！しかし、俺の声は届かない。何故ならこれは地上よりも遙か上空、相手に聞こえるはずも無い。

このままあいつが引っ張り続けたら、どうなる？糸が切れるかも知れない。

刹那、そいつは力の限り引っ張つた。ぴーんと張る糸、今にも切れそうだ。

プチッ……

ああ、遂に切ってしまった。俺は一直線に地上に落ちる。流れる景色はテレビの速送りよりも速い。

感覺が無い、体が死を悟り受け入れたのだろうか……嫌だ！ 死にたくない俺はまだ若い、やりたい事も沢山ある。

空を仰ぐと、神の助けだろうか？ 俺の横に一本の白い糸、掴めば助かるかも知れない。そう思い、手を延ばす。

しかし、俺は糸を掴めなかつた。何故ならそこに有るべき指が無かつたからだ、そしてその替わりに真っ赤な血が吹き出していた。

先程切れたのは白い糸ではなく、俺の方だつたのだ。それに今さら氣付くとは俺もつづく鈍感だな。

俺は苦笑しながら地面に叩き付けられ、周りには赤い水溜まりが出来た。後にはポタポタと俺の血が地面を濡らした。

今日は晴れ所により、赤い雨が降るので傘をお持ちになつてお出掛け下さい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5280f/>

雲の糸

2010年11月18日14時46分発行